

# 民族生業、政策と教育を通じた民族

## アイデンティティの確立に向けて

—インディアン、サーミとモンゴル族の比較を中心に—

キム ウリハン

グローバル化の進行に伴って、世界的に産業化、多様化が進行しつつある。人口の少数派である少数民族や先住民族は、都市化、工業化の影響により、民族の生業、文化などが急激な変化に直面している。伝統生業、文化と言語は、民族アイデンティティの確立と維持に関わっている。内モンゴルのモンゴル族は、従来の遊牧地域が農業による開墾や都市化、工業化などにより変化し発展するのに伴って、漢語や漢文化の影響を強く受けるようになっていく。

ノルウェーのサーミ族は、先住民として保護されているが、主流文化（ノルウェー人の文化）の影響によって、サーミ語話者の数が少なくなっている。アメリカ・インディアンは、アメリカのファーストネーションである。しかし、アメリカ連邦および州政府による同化政策によって、消滅した部族も多数ある。これら三つの民族は、民族アイデンティティの確立と維持にさまざまな試練を経験してきた。近年、民族アイデンティティを保護することは重視されているが、同時に様々な問題点も出てきている。

本論文では、エリクソンのライフ・サイクルにおける八つのアイデンティティの危機に関わって、民族アイデンティティを分析した。アメリカ・インディアン、ノルウェーのサーミ族と内モンゴルのモンゴル族の伝統生業、民族政策、民族の学校教育の先行文献を調べ、伝統生業の近代化・産業化、民族政策、学校教育の問題点を洗い出し、それぞれの問題点に対する対策を検討した。生業、民族政策と学校教育は、民族アイデンティティの確立に深く関わっていることを指摘した。

研究方法としては、生業と民族政策について、主に先行研究を収集し、文献研究を行った。学校教育については、文献研究を中心に、データの比較を行った。

序章では、本研究の研究目的を確認した。また、アメリカ・インディアン、ノルウェーのサーミ族と内モンゴルのモンゴル族の生業、民族政策と学校教育の先行研究について検討し、本論文の新たな課題と意義を明らかにした。そして、論文の構成を整理した。

## 第一章 アイデンティティの確立と伝統生業の近代化

第一節は、エリクソンのライフ・サイクル論において、人生を八つの段階に分け、八つの段階毎に発生するアイデンティティ危機について分析した。アイデンティティの概念は、エリクソンの精神分析理論の核心である。エリクソンは、アイデンティティについて以下のように述べている。

自我が確実な集団の中での未来に向かって有効な歩みを学ぶ途上にあるという確信へと変わってゆく。つまりそれは、自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我a defined egoへと発達しつつあるという確信である。そして、私はこの感覚senseを自我同一性ego identityとよびたいと思う。(E・H・エリクソン著 小此木啓吾訳『自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房 1992 p.10)

ここから、アイデンティティを以下のように捉えることができる。アイデンティティとは、自己認識のことである。人々が生まれてから、自己を探求することは、アイデンティティを確立することであり、人生を生きることである。八つのアイデンティティの危機の中には、「信頼と不信」、「自律対恥、疑惑」、「自主性対罪の意識」、「勤勉対劣等感」、「アイデンティティ対アイデンティティ混乱」、「親密対孤立」、「ジェネラティヴィティ対停滞」、「インテグリティ対絶望」があるとされている。アイデンティティ危機の葛藤に直面し、変化に適応できる人間は、エリクソンによれば、「自我の完全性」(インテグリティ)であり、言い換えれば、完全のアイデンティティである。「自我の完全性」の反面は、絶望である。人間は、老年になると、アイデンティティの欠如に対して失望し、別の人生を始めようとするが、時間がなくなり、人生に絶望する。

第二節では、乳児期から青年期において、アイデンティティの危機は、どのように生じ、また、民族アイデンティティがどのように確立されるのかについて考察した。少数民族と先住民は、社会の少数派という理由で、民族アイデンティティの危機に直面している。民族教育と社会的の関心は、少数民族と先住民の民族アイデンティティの確立と関わっている。

第三節では、民族の生業活動と民族アイデンティティの維持と確立について分析した。アメリカ・インディアンの産業化の例として、ラコタ族を取り挙げた。ノルウェーのサーミ族に関しては、ノルウェーのサーミ観光業を挙げた。中国の内モンゴルのモンゴル族の生業について、内モンゴル正藍旗の乳製品生産について紹介した。アイデンティティと民族アイデンティティの関わり、民族アイデンティティの確立と伝統生業の近代化と産業化の重要性を述べた。民族の伝統的な生業は、産業化に伴って、ただ生活のためではなく、民族の経済的自立と関わる。民族の伝統生業は、時代の変化によって、新しい形の生業を生み出してくる。伝統的な生業は、新たな形で民族アイデンティティを維持できるものになると思われる。

## 第二章 先住民族と少数民族に関する政策

第一節では、少数民族と先住民族の定義について、国による違いを考察した。先住民族は、所在国が建国以前に、その地域に居住していた人々のことを指し、また、自分自身が先住民族と認識していることである。少数民族について、大辞林には、「複数の民族から構成される国家において、支配的勢力をもつ民族に対して、相対的に人口が少なく、言語・文化などを異にする民族。多くの場合、社会の中で従属的な立場におかれているマイノリティー」と書いてある（三省堂 大辞林 第三版）。中国では、漢族以外の民族は、少数民族である。先住民族と少数民族の定義は、国によって違って来ている。両方の共通点としては、人口が少なく、同化された経験、アイデンティティの消滅の危機などが挙げられる。

第二節に、ノルウェーのサーミ族に関しては、伝統のトナカイ放牧に関する法律や、土地管理政策、サーミ族の言語保護の政策を考察した。サーミ議会は、サーミの政治的要求を中央政府に伝達する機関である。小野寺理佳によれば、サーミ議会の目的は、「先住民族としてのサーミに保証された文化的自治を計画・実行することとされている」（小野寺理佳「北歐三国のサーミ議会—現状と課題」小内透『北歐サーミの復権と現状』2018 東信堂p.50）。ノルウェーのサーミに関する法律や制度は、主にトナカイ・サーミを中心としている。しかし、環境問題の配慮によって、トナカイの数を限定することは、トナカイ・サーミの経済収入に影響を与える。また、海辺サーミ人の漁業権の法律化は、今後注目すべきである。

第三節には、アメリカ・インディアンと同化政策から権利回復まで政策変更の経緯を分析し、言語、土地、伝統生業などの法律を分析した。アメリカ・インディアンは、再組織法、言語法、信教自由法、工芸品法などがある。以上の政策を踏まえて、アメリカ・インディアンは、民族自治を取り戻し、民族言語を保護し、民族伝統を伝承していることがわかる。しかし、アメリカ・インディアンは、部族の数が多く、言語、伝統が多様である。政府の政策は、数多い部族に対して、同様な政策を実施することは困難である。また、アメリカは、移民国家であり、政策としては、融和政策を取っており、先住民にたいして、不利である。

第四節には、内モンゴルの自治法、慣習法、草原法を考察した。これらの考察によって、民族伝統と言語に関する法律は、民族アイデンティティの維持にとって重要であることを明らかにした。また、内モンゴル民族政策を概観すると、民族政策は、主に政府の規定の通りに、制定される。「民族区域自治法」は、細かいところまで定めたが、民族の徹底的自治には至っていない。また、「生態移民」などの政策によって、都市化が進行し、都市の少数民族の権利に関する条例は、完備されていない。

### 第三章 学校教育を通じた民族アイデンティティの復活

第一節では、ノルウェーにおけるサーミ人が学校教育を通してアイデンティティの復活を図ることについて検討した。サーミ人学校は、サーミ文化とノルウェー政府の政策が対立している中で形成された。ノルウェーにおけるサーミ人は、同化政策からアイデンティティの復活まで、長い時間が必要であった。その中で、学校教育が重要な役割を担った。サーミ人に対する宗教、自然科学と社会研究のカリキュラムは、サーミなりのカリキュラムを実施している。サーミ文化を学習することだけではなく、サーミ文化を身につけて生きていくことを示している。サーミ高校に通う高校生は、日々学校で大半を過ごすことにより、サーミの友人が多く、ノルウェーの文化や生活も失っていない。しかし、サーミエリア以外に進学する際に不利になると考える高校生もいる。この問題を解決できるならば、民族学校への進学率が高くなると思われる。

第二節では、アメリカ・インディアンの同化政策時代の学校教育と民族政策を考察した。アメリカ・インディアンは、アジアから今のアラスカに到着した。1492年に、コロンブス（Christopher Columbus）は、アメリカの先住民であるアメリカ・インディアンを発見した。その後、白人とアメリカ・インディアン間の葛藤が続いてきた。1880年代に、合衆国は、インディアンを野蛮から文明化する方向へ打ち出した。いわゆる、同化である。同化政策の中で、教育は最優先の選択であり、それで、全寮制学校が次々に設立された。全寮制学校の利点は、子どもを親から引き離すことによって、インディアン文化の影響を受けさせないことにある。フェニックス学校は、一つの例になる。1933年に、ジョン・D・ルーズベルトは大統領になり、ニューディール政策を始めた。インディアン・ニュー・ディール政策は、メリアム政策を実行し、文明化政策を廃止した。メリアム政策は、「インディアン政策の問題点」とも言う、「一般当地割当法」が先住民を貧困問題に陥らせ、先住民の生活を崩壊させたことについて指摘した。政策は、インディアンの伝統文化を重視し、全寮制学校を減らすことになった。

第三節には、内モンゴル民族教育の経緯とカリキュラムを検討した。三言語教育と全国統一のカリキュラムなどの政策は、民族教育の主要な形式になっていて、モンゴル族の生徒の言語能力を向上しているように見えるが、実際は、不公平である。その理由は、モンゴル族学生は、漢族学生より1つ多くの言語を学習しなければならないし、負担が多い。また、大学入試試験の際は、漢語能力が漢族学生より低いことが原因で、自治区内の大学に進学することを余儀なくされる。それで、将来の進学と就職のため、保護者は、子どもを漢族学校に通わせることを選択する。ソニド右旗モンゴル族中学校は、民族伝統文化を伝承するために、民族文化に関する趣味愛好のクラスを設けている。三言語教育を通じたモンゴル族の若者は、アイデンティティの危機に陥っている人が多数である。しかし、ソニド右旗モンゴル族中学校のように、授業以外に民族文化のクラスを設けることは、彼らの民族に対する誇りを持ちさせ、民族アイデンティティの確立に重

要であると考えられる。

## 終章

### まとめ

まず第一章では、エリクソンのライフ・サイクル論の八つのアイデンティティ危機を考察し、アイデンティティ危機が、人生の幼児期から老年期まで存在することが明確になった。それで、八つのアイデンティティ危機と民族アイデンティティの関係について、先行研究を検討する中で、民族アイデンティティも、人生において、八つの危機の段階があることが明らかになった。第一章の第四節では、民族伝統生業の近代化と産業化について先行研究を読み、サーミ、インディアンと内モンゴルの伝統生業と近・現代化された伝統生業に関する文献と資料を集めた。これらの文献と資料を分析して、以下のような結論を得た。1、ノルウェーのサーミ人の伝統生業であるトナカイ牧畜業は、サーミの主要な生活手段と言えなくなってきている。現在のトナカイ飼育は、国家の観光政策によって、重要な意味を持つようになった。また、トナカイ飼育が観光業にとって意味することは、世界にサーミ文化とサーミ民族アイデンティティの発信ということにつながる。2、アメリカ・インディアンのバッファローの牧畜業は、インディアン・カジノの巨大な利潤によって、消滅する傾向にある。しかし、ラコタ族は、伝統のタンカ・バーを広範に宣伝し、商品として販売した。伝統食品を産業化することは、部族に経済利益を与え、バッファロー牧畜業を維持できるようになった。3、内モンゴル自治区正藍旗の乳製品の産業化することは、モンゴル族の都市移民問題を解決し、伝統乳製品の伝承を維持できるようになった。伝統生業の近代化、産業化は、伝統生業を生かし、民族アイデンティティの維持に重要な意味を持つことを示唆している。

第二章では、少数民族と先住民族の定義を比較し、先住民族の定義が、少数民族の定義より明瞭であることが理解された。具体的には、以下にある通りである。

1、先住民族の定義は、ノルウェーのサーミ人とアメリカ・インディアンの定義を検討した。類似点としては、自己認識が前提となっていることである。異なる点については、アメリカ・インディアンが血統の規定と部族の承認であり、ノルウェーのサーミ人がサーミ語の使用との関係を重視している点などである。

2、中国の少数民族の定義は、上記の国家と比較して明瞭ではない。その理由は、中国の少数民族の数が多いためと思われる。

また、第二章では、サーミ、アメリカ・インディアンと内モンゴル自治区に関する資料を検討し、国の政策が民族アイデンティティの確立を左右することを明らかにした。

言語政策については、三つの民族は、行政機関や政府文書と条例は、共通語と本民族言語を使うことを定めている。内モンゴルの言語政策としては、行政機関の幹部が少数民族言語を学ぶことまで定めている。しかし、この政策は、現地で実体化されていない。

先述のように、太田の母語とアイデンティティの理論からみると、民族の言語政策は、少数民族と先住民族の民族アイデンティティを保護する目的を持っていることが推察できる。

土地と生業政策については、ノルウェーのサーミとアメリカ・インディアンは、土地を先住民に返還することが共通している。また、ノルウェーのサーミ人は、トナカイ牧畜法がある。彼らの伝統生業は、法律上で定めてある。内モンゴルの土地政策は、まず国家所有と定めている。中国の「生態移民政策」は、モンゴル族を都市へ移住させ、伝統生業を崩壊させた。中国の土地政策は、モンゴル族の民族アイデンティティに悪影響を与えていると思われる。

宗教政策では、アメリカ・インディアンと内モンゴルのモンゴル族の信教の自由が、法律上で認められていることが明らかになった。ノルウェーのサーミの信教の自由については資料少なく、確認できなかった。

伝統文化と習慣について、アメリカ・インディアンは、墓地返還から芸術品まで、法的に保護されるようになった。サーミの文化も法律的に保護されている。内モンゴルのモンゴル族文化については、法的にモンゴル族と書いてないが、一応少数民族の伝統文化を保護すると規定している。モンゴル族慣習法は特別であり、今後は法律条例として制定されることが望まれる。

第三章では、ノルウェーのサーミ、アメリカ・インディアンと内モンゴルの学校教育は、民族アイデンティティの確立に深い影響があることを明らかにした。彼らは、全て同化教育の経験を経たことは同様であるが、現在の学校教育の政策と実際のカリキュラムとは違っている。ノルウェーのサーミ学校のカリキュラムは、バイリンガル教育を行い、民族伝統文化を取り入れている。特に、民族工芸品の授業もある。サーミ高校の学生は、自民族意識が高いことと関係すると考えられる。

アメリカ・インディアンは、古い寄宿制学校を廃止した。寄宿制学校による先住民学生の身体、心理上のダメージは語り知れない。特に、学生の民族アイデンティティの確立に影響を与えた。内モンゴルのモンゴル族学校教育については、伝統教育から改革解放後の教育政策について考察した。モンゴル族の教育は、民国までは、日本の影響を受け、一時的進展していた。中国建国後、文化大革命によって、民族教育は、停止された。1977年から、民族教育は、回復されたが、かなり時間がかかった。また、モンゴル族教育については、内モンゴル自治区ソニド右旗民族中学校のカリキュラムを考察し、三言語教育を行い、モンゴル語が主要授業であることを明らかにした。ソニド右旗民族中学校の学生の民族意識については、調査していない。しかし、サーミのような民族伝統文化を取り入れたカリキュラムと比較し、三言語教育を中心にし、民族文化がないカリキュラムは、民族アイデンティティの確立に障害になるものと思われる。

また、生業は、伝統文化を含有し、民族アイデンティティの確立に影響を与える。学校教育の中の民族特色カリキュラムは、民族文化を次世代に伝承することができる。言

い換えれば、民族教育の中の民族特色カリキュラムは、民族アイデンティティを確立することができる。政策は、生業の在り方を制定し、学校教育のカリキュラムを制定する。政策は、民族アイデンティティの確立か、消滅かが決められる。このように、民族アイデンティティを確立することは、生業、民族政策と学校教育が方向一致させることが必要である。

### 今後の課題

本研究では、生業、民族政策と学校教育を通した民族アイデンティティの確立について先行研究の検討を行った。しかし、多くの先行研究では、民族アイデンティティを伝統的、不変的なものと捉え、民族アイデンティティ多様性について提起する文献は多くはない。民族アイデンティティの多様性は、今後の研究課題の一つになる。

また、本研究では、ソニド右旗民族中学校のカリキュラムとアイデンティティについて、資料収集などは行ったが、学生にアンケート調査や聞き取り調査を実施していないため、ソニド右旗民族中学校の学生の民族アイデンティティの現状が把握できていない。アンケート調査や聞き取り調査と更なる先行研究や資料の収集を行い、民族アイデンティティの現状と課題を正確に把握することが、今後の課題になる。

本研究では、民族伝統生業について、文献研究を行い、実地調査をしていなかったため、民族伝統生業を確実に把握することができていない。伝統生業の近代化を通した民族アイデンティティについて、実地調査することは、今後の課題として残すことになっている。

また、民族アイデンティティは、グローバル化の中で、純粹さを維持することが困難なりつつある。先住民と少数民族は、民族アイデンティティの多様性についても検討しなければならない。民族アイデンティティの多様性と同時に民族伝統を保護することは、今後の教育の大きな課題になると予想される。